

子規ノ卜覚書

泉

こころ

寔

まこと

# 電子書籍の操作について

- ・ 目次をクリックすると、該当ページまで移動します。  
また、移動先ページの見出しをクリックすると、目次に戻ります。
- ・ 「十字キー」やマウスのホイールを使用して読み進めます。
- ・ 「フルスクリーンモード」に設定すると、読みやすくなります。

「フルスクリーンモード」設定方法

メニューバー「表示」→「フルスクリーンモード」

Escキーで元の表示に戻ります。

※パソコン環境により、「フルスクリーンモード」が使用できない場合があります。

	子
	規
	ノ
	一
	卜
	覚
泉 <small>いずみ</small>	書
寔 <small>まこと</small>	



## 序 なぜ今子規か

『坂の上の雲』がドラマ化されて子規の本来の姿がかすんできている。軍人の話の勢いに押されて、子規の文学上の功績などは日露戦争の砲煙の中にかすんでいる。子規は明治三十一年の二月から短歌革新の運動に入った。明治に入っても和歌の世界は依然として江戸時代のままの状態であった。

明治二十一年に宮内省に「御歌所」が設けられ、その長に高崎正風まさかぜが任命された。和歌の世界では宮中が中心となり、多くの歌人が寄人よりうとなどとして関係を持つようになった。その中から「御歌所派」「宮内省派」が生まれた。これらの中心勢力は「桂園派」で、八田知紀はったともり門の高崎正風は長く御歌所長の職にあった。明治天皇が和歌への関心が

強く、その意向を受けて生まれた組織であった。

子規はそのことにかかなりの危機感を抱き、何としても庶民のサイドに和歌を取り戻そうと考えていた。俳句が庶民のサイドの娯楽であり、庶民の文学にまで生まれ変わろうとしていることに比べると和歌の世界のあり方は時代の流れに逆らったものと映った。

長い和歌の創作の経験からも、ここで御歌所の息の根を絶たねばという強い使命感がふつつつと子規の中にわき起こったのである。しかしその御歌所への挑戦は、いわば明治政府、明治天皇への反逆ともとられかねなかった。したがって新聞「日本」で子規のマニフェスト「歌よみに与ふる書」の発表は社内の猛反対に会う。それでも子規は退かなかつた。子規は命がけでやることをまわりの知人、親友に宣言した。子規の本気であることをまわりは認めざるを得なかつた。新聞「日本」の社主陸羯南くがかつなんは、新聞社の存亡を懸けることを覚悟した上で子規の試みにゴーサインを出した。太っ腹な社主であった。

こう見てくると、子規の短歌革新の仕事の重要性が見えてくるのではなからうか。

『坂の上の雲』における日露の戦、そこでの秋山兄弟の働きも見事だが、病身の子規がたった一人で立ち向かった短歌革新運動の大きさを改めて思うのである。



目次

子規ノ一卜覚書

序	なぜ今子規か	3
第一章	子規の短歌革新の歩み	11
第二章	「歌よみに与ふる書」を読む	25
第三章	「百中十首」解説	41
第四章	「百中十首」の中の動物、植物	73
第五章	「百中十首」における漢字、漢語の多用	81
第六章	子規の本歌取り	85
第七章	柿の歌	89
第八章	子規の「文学」の導入	93

第九章 明治の華族制度と短歌革新

97

第十章 子規が短歌革新にかけた思い

101

第十一章 『懶祭書屋俳句帖抄』上巻序文について

105

第十二章 河東碧梧桐『子規の回想』と意表性

111

第十三章 河東碧梧桐『子規の回想』の十章「百中十首」

115

第十四章 『坂の上の雲』について

119

第十五章 玉城徹『短歌復活のために 子規の歌論書簡』について

125



## 第一章 子規の短歌革新の歩み

### 短歌革新までの歩み（明治十八年～明治二十九年）

子規が桂園派の流れをくむ井手真棹いであまざおに学んだのは明治十八年であった。それ以後『古今集』を手本にして本歌取りを繰り返し、作歌を続けてきた。私はこの時期を習作時代と考えている。しかしその間にも変化があった。

子規の歌は、はじめは『古今集』に倣った「……や……らん」の歌体が圧倒的であったが、明治二十五年頃から『新古今集』に倣うようになり、体言止めの歌が多くなった。

明治二十七年、画家中村不折から「写生」を学び、以後それを俳句・短歌で実践した。

明治二十八年には「……て……見ゆ」、「……ば……見ゆ」の歌体が現われてくる。明治二十九年には短歌は一首もないが、評論「文学」の中で「和歌は老人の専有物となりて少年之に熱心に従事する者無し。是に於てか和歌は活気無き者となり了れり」との考えが述べられた。明治三十一年の「歌よみに与ふる書」が、すぐそこにあることを感じさせる。

### 短歌革新の前夜（明治三十年）

子規の短歌革新は明治三十一年から始まった。しかしその基をなす明治三十年の活動から見えていこう。この明治三十年の短歌はわずか六首である。しかも手紙に添えた短歌で、発表などは予想したものではない。日常の挨拶代わりの歌であった。ところがそれが革新前夜の創作として極めて重要な役割を果たしたのである。

この手紙の相手は京都に住む愚庵和尚である。彼から子規の大好物の柿十五個が送られてきた。子規はいたく感激し、得意の俳句で礼状を締めくくった。

十月二十八日 愚庵禪師 御もと

御仏に供へあまりの柿十五

柿熟す愚庵に猿も弟子もなし

釣鐘といふ柿の名もおかしく聞捨がたくて

つりがねの帯へたのところが洪かりき

ところがその翌二十九日朝、桂湖村という愚庵の親友で、子規とも親しかった人物が、わざわざ愚庵から託された歌六首をことづかり子規庵を尋ねた。

桂湖村の東帰せしに与へし歌 六首

我庵の紅葉見に来る人はあれど心へだてぬ友垣のなき

独のみこやせる我をさす竹の君がいなすは慰めもせむ

長繩の太繩はへてとめましを我背かへして今ぞ悔しき

中山の与謝野のおぢはいたつきて我より先にやがて死ぬべし

はふりらは歌をしよめとおきつ波へなみしく波しくしくにいふ

正岡はまさきくあるか柿の實のあまきともいはずしぶきとも言はず

子規はこの六首を見せられ、ことさら万葉風に詠んだ歌を早速愚庵のもとに送った。  
愚庵は万葉ぶりの得意な人であったからである。

十月二十九日 愚庵禪師 御もと

みほとけにそなへし柿のあまりつらん我にぞたびし十あまりいつつ

柿の實のあまきもありぬかきのみ渋きもありぬしぶきぞうまさ

籠にもりて柿おくり来ぬふるさとの高尾の山は紅葉そめけん

世の人ハさかしらをすと酒のみぬあれは柿くひて猿にかも似る

おろかちふ庵のあるじがあれにたびし柿のうまさのわすらえなくに

あまりうまさに文書くことぞわすれつる心あるごとな思ひ吾師

発句よみの狂歌いかが見給ふらむ

これらの歌は手紙に添えた歌で、子規の日常生活が詠まれている。読者を想定した創作歌ではない。愚庵和尚の万葉ぶりに倣おうとして作ったが、子規の歌の方がはるかに万葉に近づいて、師を凌駕している。「世の人ハさかしらをすと」の歌は大伴旅人の「あな醜賢さかしらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る」を本歌として、「柿食う我」を猿と見なしている。見事な本歌取りの歌である。

子規はこの愚庵とのやりとりを通して、これまでの生活から遊離した歌の世界の底の浅さを気づかされた。余技として詠んだ歌の方が、はるかに生き生きとしていることを発見した。愚庵のくれた柿、愚庵の万葉風の歌があって、自然に生まれた六首である。歌の材料は身近な「柿」という食べ物である。当時の和歌にはなかった題材である。庶民的な俳諧の世界ではすでになじみの材料であった。庶民的な題材への挑戦

# 途中省略

続きは製品版にてお読みください。

## 著者プロフィール

### 泉 寔 (いずみ まこと)

1936年10月12日 愛媛県新居浜市に生まれる。

東北大学文学部美学美術史学科卒。

愛媛県立砥部高校を振り出しに、松山南高校、三島高校に勤務。新居浜市立商業高校に移籍、県立移管後も同校に勤務。1996年3月退職。

新居浜工業高等専門学校教授 (1996年4月～2000年3月退職)。

著書に『私のなかの旧別子』(1994 近代文芸社)、

『さらば青春』(1996 創風社出版)、

『子規の文学—短歌と俳句』(2002 創風社出版)、

『正岡子規の日常』(2007 創風社出版)、

『時の流れをみつめて』(2008 文芸社)。

## 子規ノート覚書

---

2011年9月15日 電子版発行

著者 泉 寔

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Makoto Izumi 2011 Coded in Japan

ISBN978-4-286-10687-8

(紙の書籍をお求めの場合には、お近くの書店にてお尋ねいただくか、文芸社ホームページ

<http://www.bungeisha.co.jp> をご参照ください。)